

故園風來抄

堀田善衛

故園風來抄

故園風來抄
こ 夫人ふうらいしょう

一九九九年 六月二〇日 第一刷発行

著 者 堀田善衛 ほつた ぜんゑ

発行者 小島民雄

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―二〇
郵便番号 一〇―一八〇五〇

編集部 (〇三) 三三三〇―六一〇〇
電話 販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

制作部 (〇三) 三三三〇―六〇八〇
印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

定価は外面に表示してあります。

乱丁・落丁本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

¥1800

©1999 Rei HOTTA, Printed in Japan

ISBN4-08-774410-8 C0095

故園風來抄

目次

平城京国際色	一	7
平城京国際色	二	13
平城京国際色	三	19
平城京国際色	四	25
懷風藻から万葉集へ		31
——大津皇子——		
古事記から万葉集へ		38
高行くや	44	
神々の想像力	50	
有間皇子	56	
山上憶良と大伴旅人		62
諷刺喜劇 風流夢譚		
——竹取物語について——		
伊勢物語と井筒	74	
源氏物語について		81

源氏物語について(続) 87

ひさかたの…… 94

定家卿と後鳥羽院 101

梁塵秘抄とカルミナ・ブラーナ 108

徒然草について 116

すさまじ、清少納言 122

紀貫之氏について 128

源実朝 134

源実朝(続) 140

怪異・西行法師 146

怪異・西行法師(続) 152

慈円和尚について 157

慈円和尚について(続) 163

アッケラカンと陰々滅々

——日本霊異記について——

応仁の乱 176

応仁の乱と公家衆

——貴種流離——

183

一休禪師のエロテイシズム

189

一休禪師のエロテイシズム(続)

一言芳談抄

203

197

故園風來抄

平城京国際色 一

懷風藻、文華秀麗集、經国集などの、わが国においてはじめて編纂された漢詩集を眺めていると、この奈良朝・平城京時代、あるいは天平期というものが、今日風の言い方をするとなれば、これが如何に、それこそ国際的な時代であったかが痛感される次第であった。

この時代の年表を見ると、年に一回、乃至は二回、三回と、新羅や渤海からの遣使が平城京に到着し、日本からも同じほどの頻繁さで大使等が派遣されていて、その頻度は、いっそのこと、現代的であると言え思われて来るのであった。遣唐使や遣(留)学の徒や、僧侶諸氏などのことも言うまでもないのであった。なかには、養老四年(七二〇)に、使を靺鞨国に遣わしてその風俗を見させる、などと、東洋

史に暗い私などには、いったい靺鞨国とはどこのことであつたか、と頭を悩ませなければならぬ国との交際もがあつた。

また天平八年（七三六）には、二月二十八日に阿倍継麻呂を遣新羅大使に任命し、五月の十八日には、天竺僧菩提僊那なる人と、唐僧道璿なる人が来朝し、八月の二十三日には、入唐副使中臣名代らが唐人、ペルシャ人を率いて参内をしている。

ペルシャ人は、現今のイラン人であり、おそらく長安の都からはるばるとやつて来たものであつたろう。にぎやかな次第であつた。ペルシャ人の女性がマダムをつとめていたバーが軒を並べていた長安との比較においては、きわめて小規模ではあつたかもしれないが、平城京は立派な、人口二十万の国際都市であつた。

これに比べて考えてみれば、鎌倉時代以降のわが国は、まるで別個の国の如き、であると思われる。鎌倉時代以降の日本が現代の日本に直接つながっているとすれば、その外交政策の貧寒さ加減も、さもあらんかと思われるのであつた。

懷風藻には、天武天皇の孫の左大臣長屋王が、新羅の客（使者）を自邸に招いて宴を催したときの詩が十首ほど残っている。秋日長王ガ宅ニシテ新羅ノ客ヲ宴ス、^{ウタツ}と題された一首には、宴が佳境に入り、

盃酒^{コトゴト}皆月有リ、歌声共ニ風ヲ逐^オフ。何ゾ専対ノ士^{ヲノコ}ヲ事トセム、幸^{ネガ}ハクハ李陵
ガ弓ヲ用キタマヘ。

という次第になる。

専対ノ士とは、公式の応答をする権限を持った使者のことであり、次の李陵ガ弓とは、李陵のようにすぐれた弓ならぬ酒を用いて大いに飲め、専対の士などと四角ばらずに飲みかつ歌え、との意である。

宮廷での四角ばった応対応答は仕方がないとしても、長屋王の私邸に招かれたからには、といった国際交流パーティーのなごやかさが、充分にうかがわれるのであった。

新羅からの使者は、公式には「蕃客」として、一段下目^{シタメ}に見る、あるいは敵対感情が官人層には根強くあったのであったけれども、外交、国際関係というものは、政策だけでとりしきられるものではなかった。

なおこの頃の酒には、桂の葉で香りをつけたものや、菊の花びらを浮べた、菊酒

といったものがあつた。彼等は芳醇な酒の文化をもっていた。

ところで、平城京の貴族や官人と、朝鮮使節の間では、当然自然に彼等の双方が国語としている言葉が通じない。その間をとりもつてくれて、双方の間に思想と心情を通じさせてくれたものが、言うまでもなく漢詩文であつた。この、双方にとつての異国の文字と文学を橋架かりとしたという情況は、これをイメージとして描き出してみようとする、そこに中華大文明、あるいは中華世界帝国というものが、巨大な風呂敷のようにして、日朝双方ともが包み込まれている様子が、目に見えて来るのであつた。

そしてこの中華世界帝国の文明の圈内にありながらも、たとえば続日本紀などによると、平城京宮廷が、この「蕃客」に対して、何とも威丈高に差別と忠誠を強要するという、さびしくなるような肝ッ玉の小さい日本のナショナリズムもが、すでにして目につくのであつた。

政治と文化文学の乖離もまたすでにして明らかであつたけれども、この朝鮮使節がいざ帰国をするとなると、

新知未ダ幾日モアラズ、送別何ゾ依々ゾ。山ノ際ニ愁雲断エ、人ノ前ニ楽緒稀
ラナリ。

知りあつてまだ幾日もたたないのに、もう別れねばならぬとは、何と悲しいことではないか。山の際に別離に際してかかる愁わしい雲は消えてくれたが、宴につらなつた人々の間には、別れの悲しみが宿り楽しみは少ない……。

言語の相違、蕃客としての差別を越えた、別離の悲愁感がやはりしみじみと感じられるのであつた。

しかし、これに対しての、朝鮮使節の側からの返歌、あるいはこれに和しての詩文がこの懷風藻にはなかったが、経国集、文華秀麗集にはあつた。上代に日本を訪れた外国人諸氏の詩文だけを収集した詩文集というものが、どこかに残っているものであつたら、是非とも一見したいものであつた。彼等もまた漢詩文によって自己表現をしていたのであつたから。

そしてこれらの漢詩文が、中国の六朝の詩文の影響が濃いか、その模倣だなど

といった論の方は、専門家に任せておいていいことであって、平俗な現代の読者としては、詩文が政治を越えて、人の真情に踏み込んでいることが見えて来れば、それで充分である。

おしまいにもう一つ、中華大文明の圏内が、漢詩文によって交流していたことと、同じくローマ世界帝国がラテン語を国際語として用いていたことを思い出しておけば、そこに大きな、世界規模における歴史という、広大なものの形姿さえも見えて来るのであった。ほんの一つの詩句からでも、いわば全世界が見えて来ることの、一つの証しでもあった。

平城京国際色 二

前回には懷風藻によって、新羅からの平城京への使節を、長屋王の邸において酒宴を催して接待したときの、漢詩の交換、あるいは交歓の様子を書いたのであったが、同じくこの漢詩集には、平城京から唐国は長安へ遣(留)学に行った人の消息も記されてあった。カッコ内は筆者の註記である。

辨正法師ハ、俗姓秦氏。性滑稽(この滑稽は今時のそれとは異なつて、言句なめらかで智慧にみつ、といった意であつた。従つて)、談論ニ善シ。少年ニシテ出家シ、頗ル玄学(老莊、仏教学)ニ洪シ。太宝年中ニ、唐国ニ遣学ス。時ニ李隆基ガ龍潜ノ日ニ遇フ(李氏は盛唐の玄宗皇帝で、まだ帝位についていない頃、との

意である)。圀碁^{キキ}ニ善^ヨキコトヲ以チテ(圀碁を打つことがうまかったので)、屢^{シメシメ}賞遇セラル。

若くして老子莊子などの道家の学問や仏教学にくわしく、それでいてお喋り上手で、長安に入ってから、未だ王子時代の玄宗に氣に入られ、圀碁がうまかったので、たびたびよい待遇をうけた……。

国際交流などという四角張った言い方があるけれども、ここではお喋りと圀碁が役立って、王子時代の玄宗皇帝とこの辨正法師なる日本僧は頗るよい関係にあったようであり、彼のもたらした長安の内部情報は、平城京にとっても有益なものであったであらう。

(この辨正法師の)子ニ朝慶・朝元有リ。法師及^{マタ}(朝)慶ハ、唐ニ在リテ死ヌ。

(朝)元ハ本朝(日本)ニ歸リ、仕ヘテ大夫(五位の人)ニ至ル。天平年中ニ、入唐判官^{ニッポウシンガワン}ニ拜^メサル。大唐ニ到リテ、天子(玄宗)ニ見^ミユ。天子其ノ父(辨正法師)ノ故ヲ以チテ、特ニ優詔^{ニギホ}ヘ(手厚く親切な言葉をかけ)、厚ク賞^ホメ賜^{タマモ}シタマ